



日本女性科学者の会 (SJWS) について

The Society of Japanese Women Scientists

＜設立経緯と活動概要と意義＞

日本女性科学者の会は「女性科学者の友好を深め各研究分野の知識の交換を図り、女性科学者の地位の向上を目指すと共に、世界の平和に貢献すること」を目的とし、「日本婦人科学者の会」として1958年に設立され、1996年に「日本女性科学者の会」と改称された。設立には、女性国際民主連合副会長の平塚らいてう女史、日本人初のノーベル物理学賞受賞者湯川秀樹博士をはじめとする世界平和アピール七人委員会の多大なご支援を頂いた。

本会は、自然科学分野の第一線で活躍している会員および非会員による講演会、研究施設等の見学会、海外の著名な女性科学者招待講演会、女性科学者・研究者の地位に関するシンポジウム、交流懇親会など幅広く行っている。

本会は、1996年から男女共同参画推進連携会議に構成員として参加している。2002年から男女共同参画学協会連絡会に加盟し、学協会間での連携協力を行いながら科学技術の分野において、女性と男性が共に個性と能力を発揮できる環境づくり・ネットワークづくりと社会貢献を目指して活動している。さらに、2004年に日本学術会議19期第4部登録学術団体となり、理学振興研究連絡委員会委員および科学教育研究連絡委員会オブザーバーとして活動した。この理学振興研究連絡委員会で起草された「科学・技術を文化としてみる気風を醸成するために」は、第19期日本学術会議第4部対外報告書として2005年6月に10項目の提言を付して刊行された。現日本学術会議20期には、本会から日本学術会議会員として5名(2部:生命科学2名、3部:理学・工学3名;内2名は本会の奨励賞受賞者)が誕生し、現在、活躍中である。また、2003年から2005年には、国立女性教育会館の女性研究者ネットワーク支援のための懇談会に参加し、自然科学と人文社会科学という分野を越えて女性研究者が能力を十分に発揮し、活躍できるようにするために、研究支援に関する情報収集、意見交換、研究成果の社会的活用、異分野の女性研究者ネットワーク化促進に資するための方策について検討した。本年開催された「女子高校生夏の学校」(国立女性教育会館、男女共同参画学協会連絡会など主催)にも共催参加した。

現在、本会は女性科学者育成、地位の向上(男女共同参画環境の整備)を目指して、国内外の、多くの女性科学者・研究者との連携と強化などを進めている。

会員は、理学、工学、医学、薬学、農学、家政学等を専攻する大学、研究機関などに所属する研究者および企業の研究者・技術者で、幅広い科学・技術分野をカバーし、

男性研究者も参加している。本会は、各会員の自己研鑽を支援しつつ、国内外の多様な科学者・研究者・技術者たちとの最新情報交換と研究交流をはかっている。

＜事業＞

- ・総会 : 年1回6月に開催 (同日に奨励賞・功労賞贈呈式挙行)
- ・学術誌 : 年1回発行
- ・学術大会 : 年1回11月開催
- ・ニュース : 年2回発行 (1回は多色刷賞記念特別号)
- ・賞贈呈 : 奨励賞、功労賞の贈呈 (各年若干名)
- ・その他の活動 : 例会講演会、見学会、新春懇談会、シンポジウム、出版刊行

＜支部＞

東北支部 (含む北海道)、東海支部、関西支部、九州支部 (含む四国)

＜記念事業とシンポジウムなど＞

- 1989 創立30年誌発行と懇談会－今後の展望－
- 1993 For Tomorrow 世界の中の日本女性科学者・技術者 (国際シンポジウム)
- 1994 科学技術に女性パワーを活かすためのシンポジウム－科学技術を私たちの身近なものに (文部省女性の社会参加支援特別推進事業：シンポジウム)
- 1995 科学技術系女性人材の育成－アンケート調査、理科離れの中で (同上事業：調査研究)
- 1996 第1回奨励賞・功労賞贈呈式および奨励賞受賞記念講演会 (以後、毎年開催)
- 1996 親と子の理科実験教室－考えよう地球環境 (文部省女性の社会参加支援特別推進事業)
- 1997 サイエンスボランティア女性たちの出前理科実験 (同上文部省特別推進事業)
- 1998 サイエンスボランティア科学の芽を育てる地域女性たち (同上文部省特別推進事業)
- 1999 11th International Conference of Women Engineers and Scientists
(第11回国際女性技術者科学者会議) 日本学術会議、日本技術者フォーラムと主催
- 2000 日本女性科学者の会学術年報 創刊 (以後、毎年刊行)
- 2001 第1回日本女性科学者の会学術大会開催 (以後、毎年開催)
- 2002 パネルディスカッション 21世紀の科学教育への提言
- 2003 高齢化社会で活躍するための条件 (第1回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム分科会)
- 2004 問題を科学する－ヒトはなぜ傷付くのか？傷付くとどうなるのか？ (学術大会講演会)
- 2005 科学技術分野で女性研究者が活躍するための四つの条件－男女共同参画の実現に向けて－
(文部科学省女性の社会参画支援促進事業：シンポジウム 和光市教育委員会・理化学研究所と主催)
- 2005 東西医療の融合をめざして (学術大会シンポジウム)
- 2005 新たな未来に向かって 科学技術と女性－最前線の群像と科学像 (国立女性教育会館シンポジウム)
- 2006 社会のための科学－サイエンスコミュニケーション－ (学術大会シンポジウム：予定)

＜出版刊行物＞

- ・日本女性科学者の会創立 30 年記念誌 (1989. 10)
- ・科学技術を私たちの身近なものに(シンポジウム記録) (1994. 11)
- ・科学技術系女性人材の育成について(アンケート調査研究報告書) (1996. 2)
- ・親と子の理科実験教室(体験実験) (1997. 3)
- ・サイエンスボランティア・女性達の出前実験 (1998. 2)
- ・日本女性科学者の会 この 10 年の歩み (1998. 12)
- ・サイエンスボランティア・科学の芽を育てる地域女性たち (1999. 2)
- ・日本女性科学者の会 学術年報 第 1 巻 第 1 号 (2001. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術年報 第 4 巻 第 1 号 (2004. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術誌 第 5 巻 第 1 号 (2005. 3)
- ・科学・技術分野で女性研究者が活躍するための四つの条件－男女共同参画の実現に向けて－ (2005. 3)
- ・日本女性科学者の会 学術誌 第 6 巻 第 1 号 (2006. 3)

＜講演会＞

(*印は非会員)

1990. 6 新しい実験医学の始まり..... 医博 勝木元也*
1990. 9 遺伝情報の発現の仕組み..... 医博 都河明子
1990. 9 究極の物質；クオーク..... Ph. D 数野美つ子
1990. 12 動物の体色発現の変化と仕組み..... 理博 大島節子
1990. 12 精子形成の分子機構と不妊..... 農博 大原生子
1991. 2 ココヤシの発芽における Haustorium の形態と機能..... 農博 村上高
1991. 6 人口動態の長期変動'結婚・出産・死亡を中心に..... 理博 今泉洋子
1991. 6 Women's Many Lifetimes in Science..... Ph. D S. Traweek*
1992. 1 第 9 回国際女性技術者・科学者..... Ph. D 数野美つ子
1992. 2 尾瀬沼の富栄養化の歴史..... 主幹 矢島久美子
1992. 2 太陽紫外線と人体影響..... 工博 佐々木政子
1992. 6 年令と眼精疲労..... 医博 諏訪久
1992. 6 絹織物のテクスチャー..... 工博 馬越芳子
1992. 11 知的所有権の話..... 理博 角谷治子
1992. 11 カロリーメトリーによる蛋白質の立体..... 工博 上平初穂
1993. 6 生物を利用する環境改善の話題..... 医博 佐々学*
1993. 12 科学衛星"ようこう"による太陽フレア..... 理博 橋本静代
1994. 6 これからの教育..... 参議院議員 森山真弓*
1994. 9 抗老化関連の東洋薬物'肉従容'について..... 薬博 大倉多美子
1994. 9 大豆食品一その栄養的・産業的価値..... 農博 斎尾恭子

1995. 6 日本の活断層と関連する諸問題..... 理博 太田陽子
1996. 6 痛覚過敏の末梢神経機構..... 医博 水村和枝
1996. 6 レンズ特異的に発現する MIP 遺伝子の発現制御..... 理博 丸山千秋
1997. 6 分子組織体の構造と相互作用..... 工博 栗原和枝
1997. 6 ヒトにおける放射線リスク推定の疫学的研究..... 医博 清水由紀子
1998. 1 男女共同審議会報告..... 理博 石田瑞穂
1998. 6 D-アミノ酸を指標とした老化の基礎研究..... 医博 藤井紀子
1998. 11 ガス系消火剤と燃焼化..... 理博 佐宗裕子
1998. 11 都市計画から見えるもの..... 寿崎かすみ
1999. 6 妊娠・月産期にみられる睡眠障害に関する基礎的研究..... 医博 木村昌由美
1999. 6 分子集合系の構築とキャラクター化..... 理博 今榮東洋子
2000. 6 細胞機能発現におけるジアシルグリセロールキナーゼアイソザイムの役割. 医博 山田恵子
2000. 6 固体酸触媒に特有な酸触媒反応機構の解明..... 工博 野村淳子
2000. 10 アホウドリよ永遠..... 東邦大学理学部助教授 長谷川博*
2001. 6 有機・固体光化学の開拓と展開..... 工博 小島秀子
2002. 1 「総合的な学習の時間」－女性(男性)科学者はどのように貢献できるか－
..... 文部科学省審議官 玉井日出夫*
2002. 11 科学教育研究の展開..... メディア教育開発センター所長 坂本昂*
2003. 11 小児 2 型糖尿病をめぐって：日本における現状..... 医博 大和田操*
2003. 11 高大一貫教育の目指すもの..... 東海大学学長 理博 高野二郎*
2004. 1 企業の中で女性はどう働いてきたか?... (株)資生堂学術部部長 長沼雅子*
2004. 11 老化のメカニズム－ヒトは誰でも 100 歳まで生きられる?... 医博 石井直明*
2005. 1 日本学術会議の新体制について..... 理博 小館香椎子
2005. 11 女性の性と生－豊かな女性のライフを支援する統合医学を目指して. 医博 丸山征郎*
2005. 11 女性と漢方治療..... 医博 福澤素子*
2005. 11 医療落語 「ヘルシートーク」..... 医博 立川らく朝*

＜歴代会長（敬称略）＞

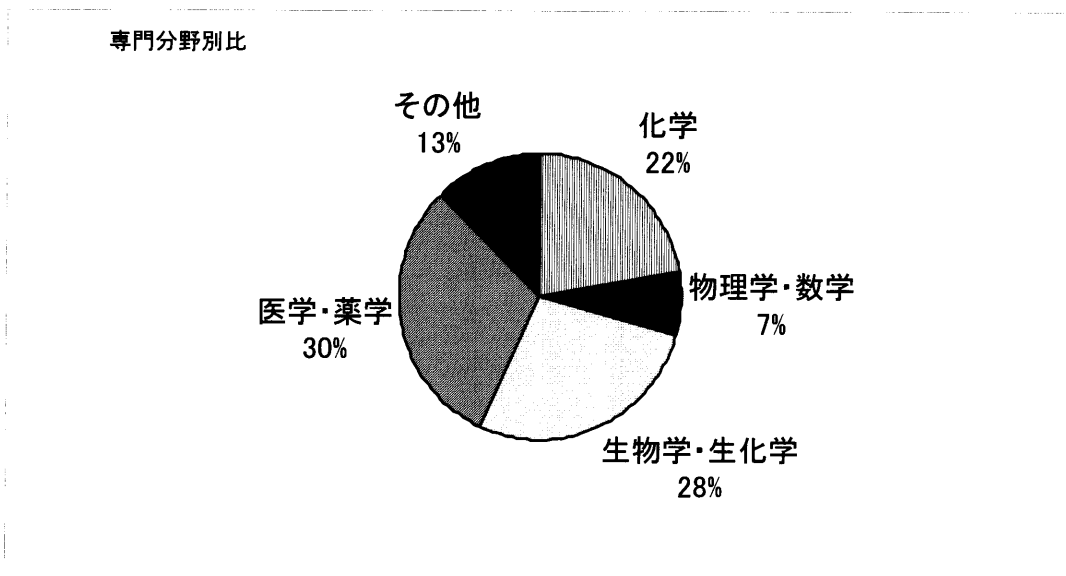
初代：阿武喜美子、第2代：幾瀬 マサ、第3代：数野美つ子、第4代：鈴木益子

＜平成 17 年度版男女共同参画白書 Column での紹介＞

平成 17 年度版男女共同参画白書(内閣府)の Column「我が国における男女共同参画のためのネットワーク」欄に、女性科学研究者の環境改善に関する懇談会(JAICOWS)、男女共同参画学協会連絡会と共に本会が紹介された(p. 35)。

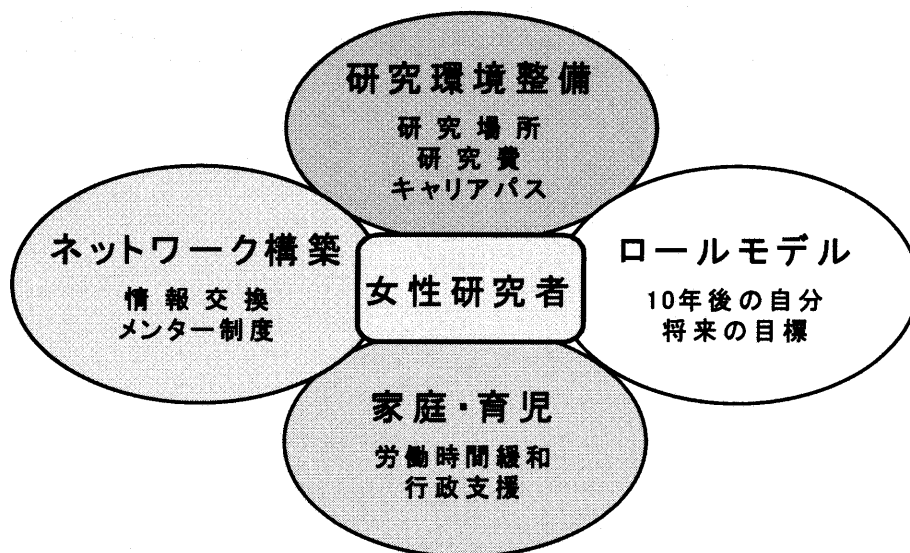
日本女性科学者の会会員の専門分野別比

(2006年3月現在)



* 物理学には天文学、気象学、地学、情報学を含む

日本女性科学者の会が提案する —科学・技術分野で女性研究者が活躍するための四つ条件—



日本女性科学者の会

平成16年度文部科学省生涯学習政策局委嘱事業 シンポジウム (2006.3.26)

「女子高校生夏の学校 ～科学・技術者たちのたまごたちへ～」

ポスター例示 (国立女性教育会館、男女共同参画学協会連絡会、文部科学省など主催) (2006. 8. 18)

P-5 活躍する女性科学者・研究者たち -日本の明るい未来を切り拓くのは私達とあなたたちです-

SJWSの会員が二人選ばれました!



Shinobu Kitazume

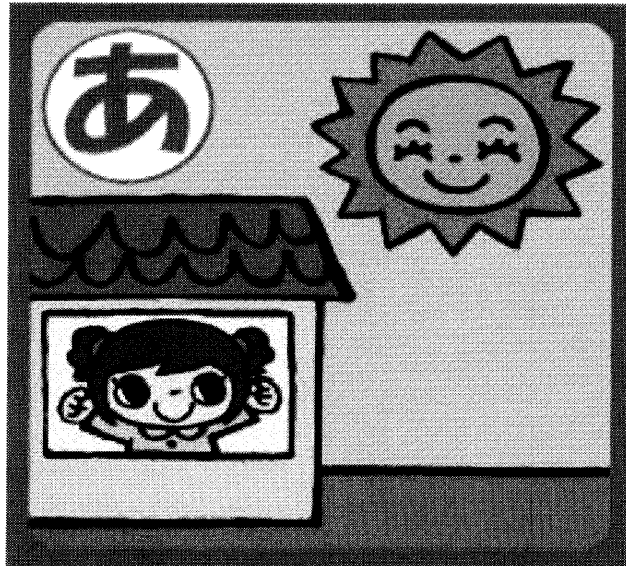
北爪しのぶ 理化学研究所フロンティア研究員。先進国など平均寿命が延びている国では認知症が大きな問題になっているが、代表的な疾患であるアルツハイマー病の原因とされる脳内蓄積物の形成プロセスの研究に大きく貢献している。

Toshiko Sawaguchi

薄口聡子 東京女子医科大学教授。健康な赤ちゃんが突然死亡する乳幼児突然死症候群(SIDS)の発症メカニズムを解明。乳幼児が睡眠中に無呼吸になったまま目覚められなくなり、低酸素状態で死亡する、というメカニズムを突き止めた。専門は法医学病理学だが、生理学や病理学、疫学などさまざまなアプローチから研究を行っている。ベルギーでの研究経験もあり、04年には日本女性科学者の金賞勲章を受賞。

担当 松下祥子 (日本大学理工学部 専任講師)

P-6 光で拓く科学の世界



朝日浴び
体内時計の
スイッチオン

(担当 東海大学総合科学技術研究所 佐々木政子)

(文責 佐々木政子 2006. 8)



日本女性科学者の会 奨励賞受賞者一覧 (敬称略)

(2006年8月現在)

第1回 (1996年)

水村和枝 名古屋大学環境医学研究所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 痛覚過敏の抹消神経機構特に痛み受容器における感作
 丸山千秋 理化学研究所 特別研究員 (現在 (財)癌研究所研究員)
 受賞理由: レンズ特異的に発現する MIP 遺伝子発現制御での転写因子

第2回 (1997年)

栗原和枝 東北大学反応化学研究所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 分子組織体構造と相互作用の研究
 清水由紀子 放射線影響研究所 疫学部副部長
 受賞理由: ヒトにおける放射線リスク推定に関する疫学的研究

第3回 (1998年)

藤井紀子 京都大学原子炉実験所 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: D-アミノ酸を指標とした老化の基礎研究

第4回 (1999年)

今柴東洋子 名古屋大学物質科学国際研究センター 助教授
 (現在 慶応義塾大学理工学部 教授)
 受賞理由: 分子集合系構築とキャラクタリゼーション=バルクから界面まで
 木村昌由美 東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 助手
 受賞理由: 妊娠周産期に見られる睡眠障害に関する基礎研究

第5回 (2000年)

山田恵子 札幌医科大学保健医療学部 助教授
 受賞理由: 細胞機能発現における DGK アイソザムの役割=EF バンドの役割
 野村淳子 東京工業大学資源研究所 助手
 受賞理由: 固体酸触媒に特有な酸触媒反応機構の解明

第6回 (2001年)

小島秀子 愛媛大学工学部 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 固相二分子反応解析と有機固体光化学の開拓と展開に関する研究
 マーシー・ワイルダー 国際農林水産研究所 主任研究官
 受賞理由: 甲殻類の脱皮・生殖・胚発生に関する生理化学的研究とその養殖技術開発への応用

第7回 (2002年)

小磯晴代 高エネルギー加速器研究機構 助教授 (現在 教授)
 受賞理由: 素粒子の実験的研究の根幹をなす加速器の開発と素粒子の対称性の研究
 尾崎美和子 理化学研究所 プロジェクトリーダー (現在 早稲田大学 教授)
 受賞理由: 脳の神経構築技術開発において多機能性神経栄養因子ニューレグリン機能を解明

第8回 (2003年)

松島紀佐 東北大学大学院工学研究科 助教授
 受賞理由: 積分方程式による翼空力形状の逆問題設計法の研究と開発をリードし社会貢献度が高い
 北爪 (川口) しのぶ 理所フロンティア糖鎖機能研究チーム 研究員
 受賞理由: アルツハイマー病発症に関与する BACE1 が糖転移酵素の切断・分泌に関わるプロテアーゼであることを解明

第9回 (2004年)

後藤由希子 東京大学分子生物学研究所情報伝達分野 助教授
 受賞理由: MAP キナーゼカスケードの同定と機能の解析に多大な貢献
 甘利幸子 Washington University Physics Department Senior Research Scientist
 受賞理由: プレソラー粒子の隕石からの抽出と二次イオン質量分析計による分析方法の確立に貢献
 澤口聡子 東京女子医科大学医学部法医学 助教授
 受賞理由: 乳幼児突然死症候群に関する生理学的・病理学的・疫学的統合研究をととしての社会的貢献

第10回 (2005年度)

池田啓子 自治医科大学分子病態治療研究センター 助教授
 受賞理由: ナトリウムポンプ α 2サブユニットの神経系における新機能の解明
 松下祥子 独立行政法人理化学研究所フロンティア研究システム散逸階層構造研究チーム 研究員 (現在 日本大学文理学部 専任講師)
 受賞理由: 自己組織化を利用したフォトニクス結晶などを作成し機能性材料の創製に貢献

第11回 (2005年度)

鳥居啓子 University of Washington Associate Professor
 受賞理由: 植物の器官形成を制御する細胞間シグナル伝達機構の解明
 佐藤 縁 産業技術総合研究所 生物機能工学研究部門 主任研究員
 受賞理由: 有機単分子層修飾による界面電子移動制御と分子認識に関する研究

以上、受賞者 22 名

「奨励賞贈呈の波及効果」

- 受賞後に、8名の受賞者が昇格あるいは専任職に就かれた。
- 北爪しのぶさんと澤口聡子さんが「世界が認めた日本人女性 100人」Newsweek (2006.6.28 日本語版) に選ばれた。資料: 日本女性科学者の会(SJWS)について参照。



男女共同参画社会実現に向けての取り組み

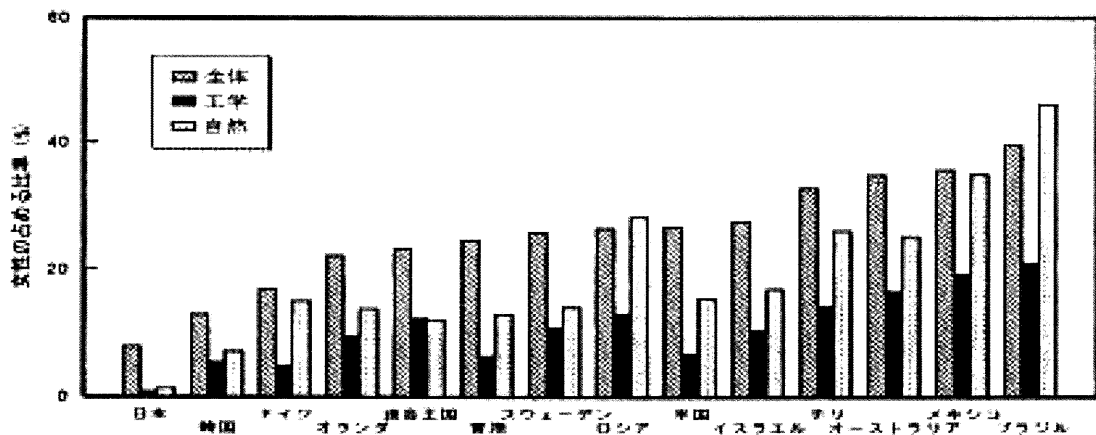
日本女性科学者の会：最近の主なシンポジウム・アンケート調査

科学技術分野の女性科学者を取り巻く研究・社会環境は、国連提唱の「国際婦人年」(1975年)および、その翌年にスタートした「国連婦人の10年」を契機として大きく変化してきた。この年に、本会は下記のような声明を出している。

1. 科学技術分野における婦人の専門教育を推進し、この分野への婦人の職業的参加を奨励すること。
2. 婦人科学技術者に、男子と同等の権利と地位を保障すること。
3. 婦人の社会的活動を容易にするための法規と社会福祉施設の整備をはかること。

同年10月に日本学術会議に初の「婦人研究者の地位向上」に関する委員会が設置された。学術会議は「婦人研究者問題シンポジウム」を1975、76、84年に開催し、本会は委員も委嘱され大きく貢献した。

しかし、日本には未だ科学・技術分野で女性科学者・研究者が活躍できる条件は整っていない。ここに、男女共同参画が諸外国に比べて遅れている具体例として、大学教授職に占める女性比率を示す。各国共に男性優位であり、女性比率は平均24%である。しかし、日本は10%未満、特に自然科学、工学系は1%以下で諸外国中、最低である。この状況は、H8年の文部省「教育指標の国際比較」以降も変化はなく、男女共同参画基本計画(第2次)および第3期科学技術基本計画の実効が待たれるところである。



大学教授職に占める女性比率

(有本章、江原武一編著 大学教授職の国際比較:玉川大学出版会 1996).

